

【各部署における今年度の重点目標と取り組み（各部署評価表）】

・学年

部 署 名	1 学 年
今年度の 重点目標	【3年間の目標】 自立した人になる 1年次の目標 「真の高校生になる」 〈生活〉 時を守る・場を清める・礼を正す 〈学習〉 基礎学力をつける・授業を大切にする・期限を守る 〈進路〉 自己理解を深める・職業を知る
方 策 (取り組み)	・学年集会、保護者懇談を通して生徒及び保護者に対して学年目標の周知を図る。 ・生活・学習の状況や変化を把握し、面談等を活用し個々の目標設定を支援する。 ・学校行事や「産業社会と人間」の学習活動を通して、自分の適性を見極めていけるような機会をつくる。
結 果	〈生活〉 ・副担任の協力をえて、集会や講演会ごとに、5分前行動の呼びかけと服装・身だしなみチェックを毎回実施し現在も指導中。一部にチェックのとき以外守らない人が残る点が課題。 ・毎日の清掃活動の徹底と、ロッカー上や HR 内に私物を散らかさないように継続指導することができた。クラス授業が減少する次年度が課題。 〈学習〉 ・教科担任の協力をえて、日々の授業への取り組み、テスト前の学習環境の整備、提出物について指導した結果、少しずつ対応できるようになっている。 ・夏休み明けの基礎学力テストにおいて、入学時の状態を維持しており、成果は出ていると判断する。 〈進路〉 ・「産業社会と人間」の授業や講座選択、校外研修などを通じ自己理解等の準備を重ね進路選択について自分の適性を考える機会をつくることができた。 ・自分の適性や将来の希望に合わせて、2年次の科目を選択することができた。

部 署 名	2 学 年
今年度の 重点目標	【3年間の目標】 自分のオリジナル人生をデザインし、多様化する社会に対応する“きょうそうりょく”を育む 2年次の目標 「協創力」 世のため人のためにすすんで動けるような存在になるために、仲間と協力し色々な事に挑戦する 〈生活〉・他者を尊重し、規則正しい生活を心がけ、身だしなみを整え、自に責任を持つ 〈学習〉・基礎学力の定着を図りつつ、専門科目の学習から自分のミライを創造する ・メモカ・質問力を継続して大切にする 〈進路〉・インターンシップやオープンキャンパスを通じて、進路目標を明確にする
方 策 (取り組み)	○生徒面談や学年集会、保護者懇談を通して生徒及び保護者に対して学年目標の周知と理解を図る。 ・1年次に引き続き、「スコラ手帳」を利用して生活の時間を記録させ、規則正しい生活を送れるよう指導する。 ・普段の授業に集中して取り組ませるとともに、「スコラ手帳」を利用してメモや探究的な学びにつながる興味・関心や疑問を記録する習慣をつけさせる。 ・各種行事で物事を決める際に、周りの意見を尊重しながら最終的な決定に至るまでの経験を積ませる。 ・各分野での学びから、将来に向けた目標を明確にし、自ら情報を収集し進路希望を実現するための準備をさせる。
結 果	〈生活〉副担の先生にも協力してもらい、朝 SHR でのスマホの回収に力を入れ、回収率が上がったクラスもある。ロッカーの上の私物や旧ジャージの着用について改善されてきているので、今後も継続指導していきたい。 〈学習〉8月の基礎力診断テストの結果を見ると、4月に比べて国数英の平均学力が向上した。9月からは論理言語力検定リテラス3級をめざした学習を始め、全国平均並みの76%の合格率と語彙運用力や情報理解力の向上に努めた。 〈進路〉夏休みのインターンシップやオープンキャンパス参加を通して、徐々に進路目標が明確になってきた。志望理由書・自己PRの書き方などの講座をLHR取り入れたり、模試への参加を促し進路意識を高めた。

部 署 名	3 学 年
今年度の 重点目標	3年間の目標：自己を肯定し、かつ他と協力して行動できる、社会の有為な形成者としての資質を育むようにさせる。 3年次の目標 生活 希望進路実現を意識した服装・身だしなみ・行動ができるようにさせる。 学習 授業に集中して取り組むようにさせる。 進路 自己を知り、さらにコミュニケーション能力を高め、適切な進路選択を自ら行い、実現するようにさせる。
方 策 (取り組み)	① いじめや暴力的な言動を許さない ② きちんと挨拶をするようにさせる ③ 遅刻はしない(5分前行動)ようにさせる ④ 身だしなみを整えさせる ⑤ 清掃をしっかりやるように指導する ⑥ 授業に集中し、積極的に取り組むようにさせる ⑦ 家庭学習を行い、課題は期限までにきちんと提出するようにさせる ⑧ 積極的に部活動・生徒会・学校行事に参加させる ⑨ 探究学習を通じて各自の進路を見出し、それを実現するためのスキルを身につける支援を行う。
結 果	① 折に触れ指導した。3年次は比較的落ち着いて学校生活が送れた。 ② 折に触れ指導した。 ③ 折に触れ指導したが、朝のSHRの遅刻はあまり改善しなかった。 ④ 折に触れ指導した。集会や授業での制服着用等はますますだった。 ⑤ 折に触れ指導したが、積極的に取り組む生徒はあまり多くなかった。 ⑥ 折に触れ指導を行い、一部を除き授業は落ち着いて受けることができた。 ⑦ 一部の生徒は、進路を見据えよく家庭学習を行った。課題提出は全体的にますますだったかと思う。 ⑧ 折に触れ指導を行った。強歩大会を始め、各種行事に前向きに、ときに楽しんで取り組んでいたと思う。 ⑨ 総研発表会では、すぐれた発表を行うことができた。CLの授業も服装を整えたうえで臨み、進路について研究を深めることがますますできた。

・教科

部 署 名	国 語
今年度の 重点目標	1 基礎学力の定着を図るとともに実践的な力を養う。 2 論理国語教材を用いるなどして、思考力・判断力・表現力を養うとともに、広く社会に関心を持ち、主体的に物事を考える力を養う。 3 ICT を活用し自主的学習、復習を行い、学力の定着を行う。
方 策 (取り組み)	1 授業時の計画的な漢字テストの他、漢字検定などの対策等を行い、合格率を上げる。 2 教員間の授業展開や教材の共有などを積極的に行う。 3 他教科との連携を行う。 4 生徒が自宅でも進んで学習できるように、classroom やロイロノートによる学習の方法を研究・対応していく。 5 語句調べをタブレットを使用して行い、時に学校に備えられている辞書を用いて調べることで、双方の長短を理解する時間を設ける。
結 果	1 授業冒頭に漢字小テストの実施を継続しているが、何度も繰り返し解答練習させることで生徒の漢字力の向上、定着に結びついていると考える。 沢山の生徒に漢検受験を勧め、上級合格へとつなげて行きたい。 2 教材作成を分担して行い、仕事の分散化により、時間の有効利用に役だった。 3 他教科との連携はなかなか取れなかった。どのような手法があるか検討していきたい。 4 ロイロノートなどの IT 教材を活用し、今日的な先進教育手法も用いたところ、生徒達の反応の良い領域もあり、一定の効果が見られた為、今後も研究していきたい。 5 語句調べでは、タブレットによる辞書サービスを利用して調べている生徒が圧倒的に多く、それもなかなか優れていると感じるが、紙の辞書の良さも知ってもらいたいと痛感している。紙の辞書利用で得られる横道的発展学習の妙味を経験して欲しい。

部 署 名	地 歴 公 民
今年度の 重点目標	1 自律的な主権者として、世の中の様々な問題について、自分事として考えることができる思考力や主体性を身につけさせる。 2 ICT を様々な場面で活用し、どのように学習に対するモチベーションを高めるか、基礎学力を身につけさせるかを追求する。 3 総合学科における地理・歴史・公民科教育のあり方を引き続き検討する。
方 策 (取り組み)	1 成人年齢が 18 歳に引き下げられ、世の中で起こっている諸問題に対し、主体的に考え、自らの意見を表現する能力が必要とされる。そのため、授業内で現代社会の諸問題に触れながら、自分なりの見解を思考させる。 2 受け身的ではない自発的な学習の形を考えるため、タブレットや意見共有等が簡単にできるシステムを活用する。教えるべき内容、身に付けさせるべき力を絞り込み、明確にする必要もある。 3 一般教養としての地歴公民科、あるいは興味関心を深める一分野としての地歴公民科の役割を意識しながら、総合学科という枠組みの中でいかに地歴公民科を生かしていくか、他教科とも連携しながら継続的に意見交換をする。
結 果	1 各授業において、時事問題等を取り上げながら、教科書の学びと現代社会をリンクさせることができた。変化の激しい時代を生き抜くために、今後も様々な社会情勢を取り上げながら授業を実践していきたい。 2 電子黒板やタブレットを活用しながら、各教員がそれぞれの方針で生徒のモチベーションを高める授業実践ができた。次年度も受け身的な授業ではなく、生徒が授業に参加する仕組みを取り入れていきたい。 3 頻度は低かったが、教科会等で授業の取り組みなどの意見交換や情報共有をおこなった。3 年生の総合研究では地域と関わる実践的な取り組みが成された。そのような取り組みを次年度も継続していきたい。

部 署 名	数 学
今年度の 重点目標	1 基礎的な計算能力を身につけさせる。 2 生徒の進路希望と必要度に応じ、一人ひとり個別に対応、指導する機会をできるだけ多く設ける。 3 ICT を活用した復習を行い、学力の定着を行う。 4 新課程における数学Ⅰ・A・Ⅱ・B の指導方法・学習評価について研究する。
方 策 (取り組み)	1 必要に応じて、プリント学習を行う。 2 宿題・週末課題を課し、点検して家庭での学習習慣を身につける。 3 保護者面談期間や長期休業中に、進学補習・不振者補習を実施し、それぞれの目的別の教材を準備し、演習・解説を行う。 4 授業内容が定着しているかを確認するために、定期テスト以外にも小テストを実施する。 5 新課程における数学Ⅰ・A・Ⅱ・B・Ⅲ・C の授業内容・授業評価について検討する。
結 果	1 学習進度に応じて、副教材（パラレルノート）等の課題に取り組むことにより、生徒の学習習慣や、基本的な計算力を培うことができた。定期テスト以外にも授業内テストを実施し、定着を測ることができた。 2 各教師がそれぞれ工夫を凝らした授業展開をすることができた。 3 新課程における数学ⅠA, ⅡB, ⅢC に関しては、生徒が主体的に学べる授業や課題を行い、一定の効果は得られた。評価方法について評価基準についてさらに検討する必要がある。

部 署 名	理 科
今年度の 重点目標	1. 中学校で学習した内容を復習することを含めて基礎・基本的な知識・技能を習得するとともに、科学的な思考力・判断力と表現力を養う。 2. 教科間の関連性や日常の何気ない疑問と理科との関係に気付かせることを通して主体的に学ぶ意欲を引き出す。 3. 新課程における観点別評価に基づき、生徒の学習と授業がよりよいものとなるように改善を進める。
方 策 (取り組み)	1. 身近なところで起こっている自然現象を取り上げるとともに、ICT 教材を活用した効果的かつ効率的な授業を展開する。 2. 実験や観察の機会を充実させ、理科の見方・考え方を身につけられるように指導する。また、学習内容と身近な事柄の関係に気づかせ、興味のある事柄に関して自分で仮説を立て検証することを通して探究的に学ぶ姿勢を育てる。 3. 授業と評価がリンクするように指導計画を立案し、実施する。
結 果	1. 教科書等の紙面で注目すべき点を電子黒板で端的に示すだけでなく、ビジュアル教材の提示や Google Classroom・ロイロノートの活用などを通して、より分かりやすい授業を追求した。また、測定機器によるデータ収集や実験の記録、Web 会議サービスを利用した他校との交流、スライドによるプレゼンテーションなどを通して、1 人 1 台端末を活用した探究的な学びを深めることができた。 2. 1 年次では「科学と人間生活」の授業を通して、理科の各分野についての興味・関心を引き出すよう指導することができた。2 年次以降の各科目では実験を多数取り入れるなど、実物から学ぶ機会を通して、思考力・判断力・表現力の育成に力を入れた。 3. シラバスで授業の目標や評価の方法を示すとともに、論理的に文章を書くことで学習を振り返る機会を多く設け、生徒にとって現時点の到達点と今後の目標がわかるように指導・評価を行った。

部 署 名	保 健 体 育
今年度の 重点目標	1 授業を通し、生徒の基礎体力の向上を図る。 2 ルールを遵守し、授業に臨む姿勢・態度を整わせ、意欲的に取り組ませる。 3 集団スポーツの中で互いに協力する姿勢を養い、協働して課題を解決する能力を高める。
方 策 (取り組み)	1 試合や練習形式の工夫を図り、運動量を確保する。また、導入段階で単元に 応じた補強運動を取り入れる。 2 服装・頭髮の徹底を図り、装飾品は必ず外してから取り組ませる。安全な活 動を確保するため、ルールに則った活動ができるよう指導する。 3 各単元の導入や練習の段階で、他者と協力して、取り組む内容を展開し、さ らに各段階で課題と目標を設定させるよう工夫する。
結 果	1 同時開講の講座数により、施設の確保に苦慮したこともあったが、概ね計画 通りであった。 2 概ね計画通りではあったが、一部では指導が浸透しにくい生徒もいた。今後 も生徒と対話をしながら、継続的に指導をしたい。 3 大多数の生徒は、仲間と協働し、学習を深める姿勢が見られ、概ね計画通り であった。より一層生徒の学習が深まるよう引き続き課題としていきたい。

部 署 名	芸 術
今年度の 重点目標	1 作品制作や演奏活動に主体的かつ意欲的に取り組める教材を工夫する。 2 芸術を通して感性を高め、芸術における表現能力の向上を図る。 3 芸術における知識と実技技能の定着を図る。 4 電子黒板、書画カメラ、タブレット等を使用した授業の実践。
方 策 (取り組み)	1 自ら主体的・意欲的に各科目の活動に取り組めるような授業展開を心がける。 2 生徒の持つ表現能力が充分発揮できるように、個別指導を充実させ、丁寧に 指導し、希望する進路の実現につなげたり、日常生活にも生かせる指導を心 がける。 3 グループワークを取り入れるなど技術指導の工夫をする。 4 電子黒板、書画カメラ、タブレットを活用した授業や、実践事例を共有する。
結 果	・文化祭での生徒作品の発表や展示をおこなうことで、生徒の自信を付ける ことができた。練習の成果を公開することで意欲を高めることができた。 ・ICT 機器を利用することで、個人の表現力や知識の幅を広げ、制作や発表に 生かすことができた。 ・希望する進路に向けて、個々に合わせた指導を心掛けることができた。

部 署 名	外 国 語
今年度の 重点目標	1 学年 学習習慣を定着させ、基礎学力を身に着ける。 2 学年 各講座の到達目標に達するよう支援をしつつ、日々の学習習慣を定着させる。 3 学年 進路実現へ向けての学習指導を実施する。
方 策 (取り組み)	1 授業では総合的な学力向上を図る。また、授業や家庭学習への真摯な取り組みを促す。 2 学年、講座ごとの特性を生かした授業展開をすすめ、学力の伸長を図る。 3 ALT との TT 授業を充実させ、5 領域バランスの取れた学力育成を目指す。 4 英語検定の実施計画及び受検への呼びかけをする。 5 必要に応じて、補習、個別指導を実施する。
結 果	1 学年、講座の実態に合わせ、「読む・書く・聞く・話す」のバランスを取りながら授業を行った。家庭学習の定着が引き続き課題となっている。 2 電子黒板やロイロノートを活用し、各生徒の興味関心に沿った授業を行った。 3 パフォーマンステスト準備・パフォーマンステストを中心に ALT との TT 授業を行った。ALT には発音指導や文法指導を通して生徒と積極的に関わってもらえた。 4 検定試験の受検を積極的に呼びかけた。また検定直前には対策補習を実施した。 5 進学希望者への補習を実施した。また模試対策・事後指導などが計画的に実施した。

部 署 名	情 報
今年度の 重点目標	1 2025 年度 大学入学共通テストへの「情報」導入に関わり、知識・技能の確実な定着や思考力の育成など、指導内容を工夫する。 2 基本的な倫理観としての情報モラルの定着を図る。 3 新課程におけるプログラミングや情報デザインなど、新たな分野の指導法や評価と指導の一体化について研究を進める。
方 策 (取り組み)	1 模擬試験の問題演習を授業に取り入れる。 2 グループ討議やクラス内発表を行ったり、生徒自身にルールを作成させたりするなど、“考えさせる”情報モラル教育を行う。 3 外部研修への参加や教育課程委員会での情報共有など、積極的な情報収集を行い、指導法や評価法を探る。
結 果	1 模擬試験の実施には至らなかった。模擬試験は全生徒に必要なため、次年度以降、授業内での実施は見送ることを検討していくが、単元のまとめごとなどに問題演習に取り組ませるなど、計画していきたい。 2 外部の教材や、実際の事例を用いた自作の教材で、情報モラルに関して考えさせる授業を行った。 3 教育課程研究委員会の研究委員として、他校の指導方法などを共有できている。評価においては、これまでの評価シートをブラッシュアップさせ、適切に評価を行うことができたと考える。

部 署 名	商 業
今年度の 重点目標	・ ビジネスの視点から社会を見る力を育む ・ 商業の専門性を活かし、地域と連携した学習活動・探究活動を追求する ・ 電子黒板やタブレットなど ICT 機器を活用した新しい授業スタイルの確立 ・ 新課程における新たな分野・科目（観光ビジネス・マネジメント等）の指導方法および学習評価について研究・実践する
方 策 (取り組み)	1 すべての授業において、社会とのつながりを意識させ、ビジネスの視点から社会の事象を多面的、多角的に見られるような授業展開を行う。 2 販売促進・販売、経営などに関する学習（マーケティング・簿記・原価計算・ビジネススキルなど）を有機的に結びつけた探究活動ができるようにする。 3 教材研究・授業準備の時間を十分に確保し、電子黒板やタブレットによる教材、授業の展開について全授業で研究していく。またロイロノートや classroom を積極的に活用する 4 各種研究会や研修への積極的な参加を目指し、特に観光ビジネスやマネジメントといった新しい分野・科目の研鑽を深める 5 新課程における授業内容について研究し、観点別評価など評価についても研究・実践をしていく。
結 果	・ 検定取得だけを目的とせず、関連事象やニュースを取り上げた授業の展開、企業との連携も実施することができた。 ・ 電子黒板やタブレットなどを活用して、生徒の主体性を生かしながら授業を展開することができた。今後も授業方法など研究を継続していきたい。 ・ 新課程による授業内容の変化による対応など、それぞれの教員が自らの課題に関するものについて研修を通して学ぶことができた。今後も研修を続けていきたい。 ・ 新課程となった授業内容や授業評価について鋭意取り組み、観点別評価を実践することができた。今後も継続して内容・評価について研究していきたい。

部 署 名	農 業
今年度の 重点目標	1 学びと働きを連携させた人材育成 2 進路実現を支援する体制づくり 3 基礎学力の定着を図る 4 危機意識を持たせ安全に作業を進める態度を養う 5 地域連携を進める
方 策 (取り組み)	1 栽培や食品製造などの農業学習（実習）を通して、それぞれの工程に必要な知識や技術を身に付けさせながら勤労観を育み、地域に貢献できる人材を育成する。 2 将来を見すえた科目選択、進路希望調査に基づいて学科内や分野間で連携を取りながら、計画的に進路支援を行う。 3 各科目におけるレポート指導を通して課題解決の力を養うとともに基礎的・基本的な学力を身につけさせる工夫を行う。資格取得を通して、意欲的に取り組む姿勢や生徒に自信を持たせ進路学習へ結びつける。 4 GAP、HACCP等の学習を通して、栽培や生産・加工に至る過程での危害要因に気づかせ、それを除くか減らすようにさせる。 5 丸子中央小学校との交流、東京農業大学との山村再生プロジェクト、農業クラブ活動、授業を通して地域連携を図り、自主性やコミュニケーション能力を養う。
結 果	1 学びと働きを連携させた人材育成は、農業科の特色でもある実学を主体とする豊富な体験を踏まえ、個々の生徒の問題解決能力やコミュニケーション能力の向上、人間力向上につなげる学習活動が定着している。また、進路について深く考えさせる「問い」から主体的に資格取得に力を傾ける生徒もいた。 2 進路実現を支援する体制づくりについては、丸子実業からの長い歴史の中で培われてきたノウハウを踏まえ、自ら選択した科目の中で、主体的に選択し取り組んだ結果が進路へと結びつくよう、資格取得も含めた支援体制が構築され、計画的に進路支援を行った。 3 基礎学力の定着については、もはや教科横断的に取り組む課題として、農業科でも以前より取り組みを模索してきた。学び直しの機会として、農業科の科目内でも意識して取り組まれている。 4 トラクターや薬品など様々な危険要素があり、学習活動の前段としての安全教育が徹底されている。このことにより規範意識の醸成や社会的ルールの厳守など社会人としての資質を養う場としてきた。さらに GAP/HACCP など社会の変遷に合わせ必要な知識・技術についても導入を推進している。 5 地域連携については例年通り進めているが、天候やコロナ渦後の近況に合わせ臨機応変に対応することができた。参加した生徒には進路選択の参考とし、職業への理解と自分の価値判断の材料として生きた形で還元できている。

部 署 名	工 業
今年度の 重点目標	1 地域貢献活動に積極的にに関わり、また社会人講師等による実技講習会を通して、生徒の意欲・想像力・職業観を高める。 2 資格取得など明確な目標設定を行なう。 3 インターンシップ（企業就業体験）を通して、学校と企業の連携を図り、情報交流の推進を行なう。
方 策 (取り組み)	1 長瀬地区金毘羅神社の祠全面改修事業、依田川リバーフロント市民協働事業、箱山城桜ロード整備事業などの連携事業の推進及び、最新技術である ICT 技術を全面的に活用した、【i-Construction】の生産性向上に向けた施工管理など全面的な活用について等の実技指導による職業観の養成。 2 各種資格取得の学習目標を明確に示し、生徒が自ら目標達成に向けて努力できる生徒参加型の授業を追究する。（ものづくりコンテスト測量部門・コンクリート甲子園への参加） 3 自己の適性・能力を見極め、将来設計に役立てるために、2・3 年生を対象に現場見学、3 次元レーザースキャナーなどの各種講習会、インターンシップ（就業体験）を実施する。生徒にとっては職業選択の探求だけではなく、自分が学校で学んでいる専門科目が社会でどのように生かされているか、研修・講習の場所で確かめることができ、今後の学習に活かすことにもなる。
結 果	1 総合研究の地域貢献活動では、昨年度から依頼を受けた長瀬地区金毘羅神社の祠全面改修事業において、昨年の社殿修復に続き、今年度は祠の改修を実施しました。また、21 年前に先輩生徒が設計・施工した丸子海戸ポケットパークのサークルベンチが経年劣化で使用できなくなっていたため、上田市の協力を得て改修を行いました。 2 2 級土木施工管理技士補 3 名・建築施工管理技士補 1 名が合格し、放課後や休日の補習授業を活用し努力を重ねた成果が実りました。さらに、ものづくりコンテスト測量部門では県大会を勝ち抜き北信越大会に出場。初めてコンクリート甲子園にも参加しました。 3 地域企業と連携し、現場・工場見学、伝統建築大工実習、最新測量研修を実施し、地域で活躍する技術者の方々と交流を深めました。

部 署 名	家 庭
今年度の 重点目標	1 家庭や地域において生徒が主体的に生活を創造する能力と実践的な態度を養う。 2 生活に必要な知識と技術を修得させるために実験・実習の充実を図る。実習や検定取得を通して生徒の意欲や進路実現への意識を高める。 3 地域との連携を積極的に図る。また、社会人講師による授業等により専門的な学びを深める。
方 策 (取り組み)	1 生徒が自分の生活を振り返り、問題点・課題点をみつけ、それに対する解決策・改善策を探求し、今後の生活に活用できるようにする。パートナーシップ協定、連携授業等を積極的に活用し、地域貢献活動への参加を促す。 2 感染対策に留意しながら実験・実習の機会をより多く取り入れる。家庭科技術検定や各種コンテスト・コンクールへの応募の機会を多く設定する。身につけた知識・技術を進路実現に活かせるよう指導を行う。 3 地域や学校間との協定や連携事業を活用したり、社会人講師を積極的に招聘し専門的、先進的な指導を行う。
結 果	1 各授業で生徒が自身や自分の生活を見つめ、その解決・改善策を考え今後の生活に活用できるよう概ね実践できた。1年生はホームプロジェクトに取り組むことができた。地域での活動では元気まるこフェスタ、NAGANO デザインフェスタ等へ意欲的に参加することができた。 2 感染対策に留意しながら実験・実習を実施することができた。技術検定やコンクールへの応募を促しサポートできた。今年度は各種コンテスト入賞（ホームプロジェクト、きのこ料理、デザインフェスタ）が多く選出された。 3 信州学をはじめ、社会人講師を招聘し専門的、先進的な指導を行えた。生徒の意識や技術の向上に繋がった。今後も積極的に活用していきたい。

部 署 名	福 祉
今年度の 重点目標	1 教科指導を通じ、生徒の基礎学力の定着を図るとともに、福祉を学ぶ者として相応しい倫理観や人権意識を育む。 2 総合学科の強みを生かし、教科横断的な視点で学習内容及び指導方法を検討する。 3 社会の変容と福祉の繋がりを理解し、福祉的な視点から地域社会を支えることができる実践力を養う。 4 新課程における教科指導方法および学習評価について研究・実践する
方 策 (取り組み)	1 生徒の学習への主体性・意欲を高めるため、電子黒板やタブレットの効果的な活用を継続する。また、多様な価値観や生き方に触れることで、豊かな人間性を養えるよう、協働的・対話的な学びを確保する。 2 他教科や地域との関わりを深めることで、多角的な福祉学習ができるよう追及する。 3 ニュースや新聞記事等を活用し、社会福祉の現状を学ぶ。また、地域社会の課題について自分ごととして向き合えるよう、福祉従事者や当事者による講話、交流学习を取り入れる。 4 効果的なカリキュラム・マネジメントを行うため、教科指導に関する研修会への参加、研究授業の実施など、自己研鑽に努める。
結 果	1 電子黒板やタブレットを活用することで、自らの興味・関心がある福祉に関する事象について主体的に学び、他者と共有する姿勢が見られた。また、生徒同士や外部の人材との協働・対話から、多様性の尊重や人権意識も培うことができた。 2 年間を通じて、上田市および丸子地域や福祉関係機関との交流・協働学習を多数実施することができた。また、教科横断的な学習として、教科「家庭」（被服・食物）と協働した地域イベントでの販売・ワークショップ、教科「農業」で栽培した花や、収穫した米を使用した高齢者施設でのレクリエーション活動なども行った。 3 社会の課題・話題を題材にした授業、体験学習、講話などを通じ、福祉的な視点で社会を捉える力が育まれた。特に、地域の高齢者を対象としたスマホ教室や、eスポーツ体験会では、高校生ならではの発想・知識を生かした地域貢献ができた。また、障害当事者、小学生との地域バリアフリー調査では、福祉の「見方・考え方」「知識・技術」を活用し、小学生の学びをサポートする主体的かつ協働的な姿が見られた。 4 教育課程研究委員会の研究委員として、効果的なカリキュラム・マネジメントを目指し、研究授業を実施、観点別評価の手法検討など、研鑽に努めることができた。次年度も継続する。

・係

部 署 名	教 務
今年度の 重点目標	1 災害、感染症等への危機意識を高め、安心・安全が担保された学校運営を行う。 2 本校における教育活動の趣旨や取り組み状況を、各種メディアを利用して情報発信し、校内外を問わず理解を深め、関心を高めてもらう。 3 図書館について、総合研究や探究学習の、学習センター的な役割を担うために資料の充実を図り、利用者増加につなげる。
方 策 (取り組み)	1 危機管理マニュアルについて情報収集を行い、災害ごと、事象ごとにマニュアルの追加や刷新を図る。 2 報道機関などへの取材依頼を積極的に行うだけでなく、校内の関係部署と連携しHP・Instagramの充実を図る。 3 図書委員と協力し、様々な企画立案・展示・掲示を行う。
結 果	1 危機管理マニュアルについては、新年度になってからの情報に内容の更新を行った。次年度へ向けて、追加事項がないか十分検討していく。 2 事象ごとにより掲載の可否を管理職に判断してもらう形で更新を行った。 3 図書館利用の促進、図書館のイメージアップに関わる効果的な宣伝を行い、利用者増加につながった。 また、通常授業において図書館を利用した指導を実施し、特に３年の表現比較では、本の紹介ポップ作成を行ったが、生徒達に図書館の有用性、本の面白さを再発見する契機になった。

部 署 名	情報管理
今年度の 重点目標	1. 【情報管理】校務の情報化、教育の情報化に関わるシステム導入、機器導入などが職員の負担とならないよう的確な支援を行う。また、全職員が ICT 機器を利用した授業を行うことで BYOD 端末の有効な活用ができるように支援する。 2. 【校務支援】統合型校務支援を利用して行う業務についての情報を職員全体で共有し、円滑に作業が進められるように努める。 3. 【視聴覚】放送委員会の行う放送を通じて、全校生徒に正確な情報や明るいメッセージを提供する。放送機器の準備・運用を通して行事が円滑に進行するように努める。
方 策 (取り組み)	1. 【情報管理】わかりやすい説明、マニュアル作りに努める。ネットワーク活用委員会や GIGA スクールサポーターと連携し、オンラインによる学習支援や学習効果を上げる ICT 活用の実践を進める。 2. 【校務支援】統合型校務支援を利用した業務が円滑に実施できるよう適切な時期に案内を行う。時間割に関する業務（年間・考査・特編）、講座選択に関わる業務は他の分掌と連携しながら進める。 3. 【視聴覚】放送委員会の活動として職員の指導の下、朝・昼・清掃時に放送を行う。文化祭時の放送を担当する。学校紹介等のビデオ制作を行う。行事・式典時の放送業務を担当する。
結 果	1 および 2. 適切な時期に的確な案内をすることができた。講座選択作業では、校務支援システムとの連携機能構築により担任の負担を軽減させることができた。一方でネットワーク活用委員会の役割と GIGA スクールサポーターの活用について検討が必要であった。また、生徒購入のタブレットを十分に活用できていない、目的外利用が目につくという声もあった。授業における ICT 活用の事例共有や研修の実施、タブレット利用ルールの見直し・徹底など、次年度に引き継いでいく。 3. 日々の放送当番や各種行事において放送委員会の活動を適切に支援することができた。学検業務や行事においても、適切に運用することができた。

部 署 名	生徒指導
今年度の 重点目標	1 規範意識を高め、学びの場づくりを支援する 2 いじめや暴力はもちろん、からかいや嫌がらせのない明るい集団作りを支える。
方 策 (取り組み)	1 全職員の協力体制の下、頭髮服装指導の徹底を図る。 2 情報端末に関する学校統一ルールの徹底 3 遅刻・中抜け・無断早退等の防止に努め、授業に向かう姿勢を醸成 4 生活実態調査を行い、生徒の状況を把握する。 5 生徒相談・生徒会等校内各部署との情報交換を密にし、連携を図る。 6 職員及び保護者へ指導方針や方法について発信
結 果	1 授業中の制服指導については徹底できているが、それ以外での指導については教員間の温度差があるので、校則の見直しの必要性を感じる。そして登下校での旧ジャージ着用の生徒がまだ目立つ。 2 携帯電話を預けない、またはダミーの携帯電話を預けるという問題が起きてはいる。 3 高学年ほど掃除をしないで早退する生徒が目立った。ケジメのある学校生活を送らせるよう粘り強い指導を継続していく必要がある。 4 高学年ほど回答率が低く、全校生徒の状況を把握できていない。また、生徒相談でも似たようなアンケートがあるので、どちらかに統合し、回答率を上げていく必要がある。 5 生徒会で校則見直しについてのアンケートを取ってもらったので、連携して校則の見直しについて協議していきたい。 6 全ての保護者が理解しているとは考えにくいので、今後は学校のHPなどで公開していく必要がある。また、保護者の理解を得るためにも、時代にあった校則の見直しが必要でもある。

部 署 名	生徒相談
今年度の 重点目標	1 心身に不安を抱える生徒を早期に発見し、担当者間の情報共有を密にする。 2 校内外の関係機関及び保護者と適切に連携をとり、円滑な学校生活・社会生活が送れるよう生徒を支援する。
方 策 (取り組み)	1 スクールカウンセラーの有効活用を立案、実施する。 2 アセス(学校環境適応間尺度)の調査を全学年で実施し、活用する。 3 学年会で支援が必要な生徒の情報を共有し、その情報を係で集約して、必要に応じ係チーム支援会議・教科担当者会議等を開催する。 4 生徒の状況に応じてSSW、自立活動支援員、サポートマネージャー等校外の専門機関とも連携し、適切な支援が継続的に行えるよう調整する。 5 相談力向上事業における教職員ワークショップ、生徒ワークショップなどを計画していく。
結 果	1 今年度も生徒・保護者のカウンセリングをお願いした。途中で配当時間を追加していただいた。カウンセラーや養護教諭、係、担任で情報を共有し、対応について話し合った。継続的なカウンセリングによって安定してきた生徒もあり、ありがたい。 2 1年生は年2回、2・3年生は年1回アセス調査を実施し、担任を中心に生活満足度等の低い生徒について、面談を行っていただいた。アセスの調査実施後に学年で結果共有会を開き、1人ひとりの生徒の実態把握・内面理解に努めた。リスクの高い生徒について、より注意深く見守る視点を多くの教員で共有することができた。 3 学年会での情報共有により、SCやSSWにつなげることができたケースがあった。また、心配な生徒については、教科担当者からの情報を集約し、上田養護学校巡回指導員に面談や授業観察をお願いした。いただいた助言を教科担当者間のチャットで共有し、対応に役立てることができた。 4 上記のメンバーが一堂に会しての合同会議を持つことはできなかったが、養護教諭、学年、生徒指導係とは個別に情報共有を行い、連携することができた。今後はさらなる連携を図っていけたらと思う。 5 今年度は、職員研修会を実施できなかったもので、来年度は本校の現状に見合った研修を計画できるよう、準備していきたい。

部 署 名	生徒会
今年度の 重点目標	1 生徒会活動の運営や学校行事等を積極的に企画・運営できるようにするとともに、自治組織としての自覚を持って活動する。 2 他の生徒の模範となるような学校生活を送る。 3 文化祭の在り方を考え、企画や実施方法の検討を行う。
方 策 (取り組み)	1 各種生徒会行事における実施計画などを、生徒会本部役員、各正副委員長に立案させ、生徒が主体性をもって業務に取り組む。 2 日常の服装や挨拶など、生徒会役員として自覚を持った行動をさせる。 3 他校の様子を聞きながら、実施案や企画を計画する。 4 上記のことを実践させるために、個々に応じた助言を職員が行う。
結 果	1 生徒が主体となり計画性をもって行事や活動をすることができた。また、行事ごとに振り返りを行い、来年度に向けた各行事の準備を進めている。 2 服装などまだまだ自覚が足りない役員がいるのが現状である。リーダーとしての自覚を持てるように継続して指導していきたい。 3 熱中症や感染対策をしながら、役員を中心にさまざまな行事のあり方を考え、責任をもって業務にあたることができた。

部 署 名	進路指導
今年度の 重点目標	1 生徒の職業意識・進路意識を高め、学習意欲の喚起に努める。 2 生徒の進路実現のために、校内指導体制を充実させ、外部機関も活用する。 3 進路情報の収集・整理・提供に努める。
方 策 (取り組み)	1 各学年・教科・係との連携を密にして模擬試験、補習等の一層の充実を図る。ショート・スタディなどを通して、基礎学力の定着・向上を目指す。また、社会とのつながりや将来の社会的自立に繋げていく。 2 サポートーズシステム（教科の教員も含めての全員指導体制）や複数副担任制を十分に活用し、面接や小論文などに対する万全な指導体制を確立する。出口指導は進路指導の一部にしか過ぎない。学校の諸活動すべてが「人格形成」の場であることを再認識し、教職員が一丸となって指導にあたる。 3 資料・情報を収集・整理し充実させると共に、職員間の情報共有に努める。特に、より具体的で有効な情報を提供し、十分に活用できるよう指導することで、三者（生徒・保護者・教師）の意思統一に基づいた進路実現を目指す。情報提供には Teams, Classroom を有効活用する。 4 産学官連携事業として、3月期に上田市商工会と提携し1・2年生対象の「地域の産業と企業を知る会～丸修産業フェス」を計画・開催し、地元産業界の紹介と生徒の進路意識向上を目指す。
結 果	年度当初の計画をおおむね達成できた。 ・夏季休業を中心に補習を行った。模擬試験は3学年6回、2 学年4回、1 学年1 回実施した。 ・面接練習では、学年を超えて実施できるよう依頼したが生徒自身が活用しきれなかった面もある。進路未決定者への面談を行い、進路実現に向けてサポートした。 ・丸修産業フェスは3月6日実施。その他学年として進路ガイダンスを行った。

部 署 名	総合学科推進
今年度の 重点目標	総合学科の特色ある教育活動を推進し、総合学科に対する理解の促進をはかるとともに、学習と自己のあり方や生き方を結びつける充実したキャリア教育を実践し、深い自己理解・社会理解に裏打ちされた人間力の養成に努める。 1 1学年 「産業社会と人間」を中心としたキャリア教育を展開し、目先の進路だけでなく、今後の人生を考えるうえで根幹となる考え方や汎用的スキルの修得を目指す。 2 2学年 自己の具体的な進路設計を行うとともに、グループ活動など協働的な学習を通じ、探究活動を行うための基礎力の修得を目指す。 3 3学年 自らの学びの集大成としての総合研究を充実させるとともに、教科間連携を推進し、多面的・多角的な視野を大切に協働的な探究活動に挑戦する。
方 策 (取り組み)	1 1学年の「産業社会と人間」においては、社会の変化によりこれからの時代を生きていくうえで必要な力について理解を深めさせる。また、徹底した自己理解ワークを積み重ね、インターンシップや上級学校見学など校外学習の充実により職業理解・社会認識を深めたうえで、講座選択に取り組ませる。 2 2学年の「探究基礎」においては、探究メソッドの習得を重点におき、「総合研究」への足がかりとなる探究基礎力の養成に向けたプレ探究活動などを展開していく。 3 3学年の「総合研究」においてはテーマ設定と仮説の立案を重視し、自身の学びの柱だけでなく、他分野との連携を深め、知識や技術の深化と総合化をはかる。
結 果	1 「産業社会と人間」では、インターンシップの学びを深めるため、事後課題を実習先の事業所から出題してもらう形式に変更した。単なる体験報告ではなく、地域や業界などの課題認識を深め、解決に向けた探究活動を導入したことで地域産業への理解や勤労観の醸成について一定の効果があつた。 2 テーマ設定の方法や先行研究の把握など探究活動に必要なメソッドやスキルを講義やプレ探究を通じて修得させることができた。次年度以降の総合研究の底上げになるよう今後も指導内容の充実を図りたい。 3 地域との協働や生徒が主体となった研究活動が増えてきた。しかし、主体的な研究活動となっていない生徒も一定数おり、教員側のファシリテーション力の向上も課題となっている。次年度は探究基礎の内容をふまえ、質的向上につながる指導の研究と共有を目標としたい。

部 署 名	保健・美化
今年度の 重点目標	1 生徒と教職員の健康を保持増進する。 2 学校環境を整備し、教育活動が円滑に行われる様に環境を適切に調整する。 3 感染症に対する予防対策を推進する。 4 衛生的で、よりよい学習環境づくりのための日々の清掃活動指導。 5 行事日前・後の（行事日を活用した）清掃指導の強化。 6 ゴミ分別指導の徹底。（可燃ゴミ・再生紙・プラスチック等） 7 ゴミステーション生徒当番制の運用。 8 清掃用具等の補充・交換および収納状況の点検指導。
方 策 (取り組み)	1 健康診断、検査等を計画的に実施する。L H R時に講師を招き、薬物や性問題など学校生活に基づく話をお願いし、望ましい健康観を育てる。教職員を対象に心肺蘇生法講習を開く。 2 水質検査、危険箇所の確認のための巡視、採光や空気などの調査を随時行う。また、学校医や学校薬剤師との連携を密にし、生徒や教職員が生活しやすい環境を整える。 3 手洗いの奨励、換気の実施、施設の消毒等できる範囲で実行していく。 4 委員会生徒及び職員による定期的点検清掃。 5 行事前後の校内清掃を全校生徒で実施。 6 定期的な清掃用具点検。 7 各教室の受講生徒数の机・椅子数確認を年度末に実施(引継ぎ)。
結 果	1、今後実施予定のものも含めて、おおむね計画通り実施できた。 2、おおむね計画通り実施できた。 3、委員を中心に実施することができた。 4、おおむね計画通り実施できた。 5、おおむね計画通り実施できた。 6、清掃用具の補充は実施継続中である。 7、年度末に予定している。

部 署 名	渉 外
今年度の 重点目標	1 P T A行事を通して、保護者・教職員の信頼関係および親睦を深め、教育活動の円滑化を図る。 2 同窓会業務の円滑な運営に協力する。 3 同窓会組織の維持・拡大に協力する。 4 同窓会員相互の親睦及び学校との連携を図る。
方 策 (取り組み)	1 オクレンジャーを活用し、P T A活動への参加協力を促す。 2 「PTA 総会資料」や「PTA 会報かがやき」の配布等情報発信により、学校の取組みや学校の近況を保護者に伝えると共に、諸行事への参加を促し、保護者・教職員の信頼関係の構築と教育活動の円滑化に努める。 3 同窓会諸行事の円滑な運営と行事内容の再検討 4 同窓会支部組織拡大への具体的対策を検討する。
結 果	・PTA は、文化祭でのペットボトル販売や強歩大会の給水補助、GWT 研修、学校整備など多岐にわたる活動を展開し、会報などの情報発信方法も改善しました。これにより、保護者と教職員の信頼関係が深まり、教育活動の円滑化が図られました。 ・同窓会は、定期総会や支部総会がコロナ前の状態に戻りつつある一方、退会者の増加や会費徴収減が課題となり、今後の運営への影響が懸念されます。 また、在校生への就職支援やクラブ振興などの支援活動も継続して行われました。